JAXA の吉川健太郎 産学官連携部長が資料 16-2 (小型副衛星の選定結果) を説明した後、活発な質疑応答があった。(平成 18 年 8 月に 21 件の応募があった。同 10 月のヒアリングにて絞り込み、19 件を登録した。平成 19 年 5 月に (平成 20 年夏期打上げに間に合うもの) 13 件を対象に選定委員会を開催し、6 件を選定した。)

野本：興味があるので伺うが、ソラン株式会社というのは、何をしている会社でしょうか。また、右 (ミッション内容欄) に「障害を持った子供たちの夢を宇宙につなげる活動」と書いてあるが、その下に書いてある3つとその言葉が繋がらない気がするが、どのような関係が有るのか分かれば説明願いたい。

JAXA 吉川：ソラン株式会社は、一部上場企業で、社員数 2,800 人位を抱え、社会的貢献を活動の中に入れている会社で、本業はコンピュータソフトウェアの開発である。子供に夢を持たせると云う、社会的貢献を会社として取り組みたいという社長方針がある。会社のお金を割いて、新しいことに取り組む、ベンチャラスなことをやるところに、メリットを感じ取っている。会社の人間が、此処にあるような、30 センチの衛星に着ける小さな伸展式のアンテナなどを造り込んでいく作業を、障害者の方々に逐一見せながら、このような試みを通じ、人間の宇宙に対する憧れを大人が取り込んでいく、取組ざまを障害者の方々にお見せしながら、意気に感じているとか、お子様のやる気というか、…取組の姿勢を見せたいということが今回の取組の目的という風に、ご説明いただいております。そういう意味で、他の大学などのミッション内容とは異なり、勿論ミッションはあるのですが、新規的、画期的なことをやるのを目的にはしていない。ある程度できそうなことであるが、其れを企業に取り込む様子を、むしろ副次的に、障害者の方々の励みにするという目的を挙げていらっしゃいます。その部分が、評価委員の方々に感銘を与えたと云う風なことがありました。答えになっているでしょうか。

野本：有難うございます。それから、この 20 年度のロケットというのは、GOSAT を打ち上げるロケットなのですか。

JAXA 吉川：実は GOSAT 打上げを予定する事業者との、本件関わる正式の以来がまだ整っていないので、GOSATという名前はまだオープンにはしていない[1]。これからその辺が整えばオープンに出来る状況になります。従いまして、答としては GOSAT を打上げるロケットを予定しております。

野本：それから現実問題として、副衛星が選定され、勿論、もう造られているところもあると思うが、今後、JAXA から資金援助や技術援助を計画されているのか、それとも完全に自分たちの力でやって頂くのか。

JAXA 吉川：選定された後、6 団体については、可能な限り技術的な援助は行なう方針である。例えば、一部、東大阪宇宙

[1] 公開の場で、このような発言をすれば、オープンにしたのと同じではないか。詳しく説明すれば良いというものではない。

開発協同組合の SOHLA-1 については、この取組とは全く別個に、JAXA が以前から技術指導を行なっていたが、その問題と今回の選定の問題は、完全にファイアウォールで隔離して、別個に客観的に審査をした。資金援助は従前も、これからも一切発生することは無い。

松尾：はい、有難うございます。他に御座いますか?

森尾：21 の応募のうちで間に合うもの 19 を登録されたということであるが、実際は来年の夏の打上げというスロットを希望するのが 19 と理解して良いのか。

JAXA 吉川：左様で御座います。

森尾：ということは、その次の機会というのは、大体何時ごろを想定されているのか。

JAXA 吉川：社内でも、これという具体的な名前は、ぼんやりとした候補名では出ているものの、私どもの方ではまだ教えられていない。

森尾：残ったものの中で、今回打上げられ、ミッションを達成したら、打上げる意味がなくなるようなものは無いか。同じようなもので、優れたものがあって選に漏れたものがもしあれば、先に打ち上げられたものが○○。

JAXA 吉川：其れは、殆どのものがユニークな発想のもので、此れをやってしまったから、此れは意味が無いよう言うようなものは無い。従って、落ちたものも、機会があればチャンスを提供することであると理解している。

森尾：原則として、打上げさせてもらう人たちは、得られる情報は公開するのか。

JAXA 吉川：衛星から得られる情報は、一義的には先ず私どもに公開をしていただき、両者が合意に達すれば外部にも公表するという順序になる。

森尾：無条件の公開ではない。

JAXA 吉川：業者のノウハウとか、知的所有権に属するものがある場合は、どうしても「納得ずくで」ということになる。

青江：今の情報公開とも関係するが、打上げ代金はただですよね。この段階で打上げ代金を頂くような性格のものではなかろうということで結構である。これから先の問題として、空きスペースを利用して、小型衛星、副衛星というものを有料でも良いから打上げてくれ、というような私企業、営利企業があると思う[2]。其れは、この枠組みの中で、受け止めてもらいたい。むしろどちらかというと、正当な対価を払いますという人は、よりプライオリティが高い。それだけのリスクマネーを自分が払ってでも良いからそのチャンスを使い、産業的な展開をしたいということと、大学の大学院生の所謂お勉強と、どちらがバリューが高いのかと言われれば、色々議論があると思うが、そういったものをきちんと噛みこむように、是非して欲しいという気がする。この制度の中に、有料

---

[2] 何時の日か、そうなるであろうことは認めるが、それほど早く実現しないと思う。遺灰の散布のようなミッションは、日本で行なわれるであろうか。

其れより、商業打上げに先立ち、法的枠組みを整備することが大切で、其れは JAXA に付託できないことである。米国では、運輸省の中に、COMSTAC を組織している。

部分を。

JAXA 吉川：正にそのように思います。全く別の話であるが、私が産学官連携部長をこの４月に拝命したばかりであり、産学官連携部というのは JAXA として収益を検討していく、今仰られた「打ち上げの機会との代償に打上げ料を頂くという」そういうビジネスモデルも検討するのが、私自身の新たなミッションとして認知しております。

青江：それで、そうした上で、私企業の衛星打ち上げによって出る成果は、出来る限り公開してもらう[3]。大学は多分論文の形か何かで、何も言わなくても出てくる。私企業については、出来る限り、無償の段階のもの、ソラン株式会社はこういう意識でやるのであるから其れは其れで良いが、今回も無償

[3] 細かい説明をする気が無いようであるから、当たり前だと思っていらっしゃるようだ。本当であろうか。商品価値を上げるような技術情報は特許法で保護されている。しかし、技術情報を保護することによる発明会社の利益保護と、情報を公開して他社の技術力を向上させて国家利益・社会利益に貢献することとが、背反しているため、特許の有効期間は知的財産の保護に比べて極めて短くなっている。

また、国家安全保障に関わる情報の秘密保全は、特許とは違う枠組みで管理されているが、米国の場合には、情報の発生時点で、公開までの年数が定められるようになっていて、特許より遥かに長い期限まである。

３種類の秘密保全制度を参照すれば、または即座に公開される科学研究成果も含めれば、「出来る限り公開」ではなく、「然るべき期限を置いて公開」と言っていただきたかった。

で良いのだと思うが、自律型オンボード管制システム何とかカンとかは、場合によってはソラン株式会社の営利活動に繋がる可能性もある。それはそれで結構だと思う。しかし、この、無償による打上げによる成果、無償の限りは出来る限りオープンにしていくようにしてもらう方が、良いのではないかという気がする[4]。だからと言って、折角のビジネスチャンスを奪うというのもあれなんですけどね。その辺のバランスはチャチツバ (?) だと思いますけどね。

JAXA 吉川：多分有償の場合のプログラムは別途検討する必要があると思うが、無償の場合は、私どもが今お客様にぶつけている内容では、成果の知的所有権の全てはこちらに移転していただき、なおかつ、公開も私どものサイドで出来るような[5]、

青江：だけどそうはしていないでしょ。今回は。

JAXA 吉川：無償の場合は、あのー

青江：此れ、今回、全部無償。そうするとそこでの成果は、全部オープンということにしているのですか。そうではないのでしょ

[4] 打上げ余力の利用が有料・無料に関わる話ではなかろう。但し、「無償」であるが故に、JAXA は「知る権利を有する」ことを主張できる。また、此処で知ったことを公表する権利について、交渉することは出来る。または、JAXA が決めた公表の条件に従い、利用者が其れを飲むか、他の手段を選ぶかの、決断をすれば良い。

[5] 本当に公開できるようになっているのか。後の説明で読み上げた範囲には、このような記述はない。「利用する権利」と「公開する権利」は異なるものであろう。

う。

JAXA 吉川：今回のスペックの中では、基本的にこちらに全てオープンにして貰うという、(割り込まれる。)

青江：いや、JAXA にオープンではなくて、

JAXA 吉川：一般にですか。　はい。細かいところを読ませていただきますと、「JAXA はその頂いた研究成果を、自由且つ無償で利用できる権利を有する。」と云う、そこまでは今、押さえてあります。

青江：まあ、サンタク (?) 的に言うとそんなもの[6]か。

JAXA 吉川：はい。済みません、拙(つたない)い動きで。

池上：打上げコストはいくらと言っているのか。例えば、キログラム当りいくらというような形で。そうすれば相手も喜ぶ。

JAXA 吉川：皆様との交渉の場では、1 キログラム当りの世間相場[7]では何万円だから、お宅の場合は何千万円くらいを節約できている筈ですとか、ロシアまで、もし、持ち込まれたとしたら此れくらいの費用がかかる分を提供しているのですとか、その辺りの目の子は説明しながら進めています。

松尾：まあ、この、有料枠をもうけるについては、「下らないものでも金さえ出せば載せるのだ。」てなことにはならないと思いますがそこは十分ご検討いただきたい。どうせ、此れ、精神的な話、フィロソフィカルな話が優先される話ですよね。此処で稼いで、JAXA の予算状況が楽になるとは、全然思えない[8]から。まあ、良くお考えください。

森尾：最後の青江さんのあれにダブるが、今の説明だと、JAXA が、打上げた人たちの情報の、守秘義務を負うみたいな内容だと思う[9]。JAXA の中には公開され、使えるけれど、その先は何も言っていないのであるから、(割り込み)

JAXA 吉川：ただ、権利を有する。

森尾：だから其れは守秘義務を負う。リスクが伴うということで。勿論、JAXA がデータを利用できることは大切であるが、やはり、原則一般公開が可能なように[10]、守秘義務を負わない

---

[6] これ以上何の権利を主張できるのか。また、「利用できる」ことに価値はあっても、「公開できる」ことに何の価値があるのか。そこには「公金を使っている」ことに対する「美学」しか感じられない。

[7] 利用者との交渉は此れで良いが、宇宙開発委員のチェックは此れでは済まない。打ち上げ費用を全ペイロード質量で割った値、または、アダプタも含めた質量で割った値も把握しておいて頂きたい。但し、公開する必要は無い。

[8] 正にその通りであるから、「何のために有料化するのか」の思想が確立していなければならない。

[9] JAXA の負担が増えはしないと思う。衛星やロケットの開発で JAXA がある企業にシステム・装置・ユニットを発注した場合、その技術情報は JAXA の所有になるものの、JAXA がその会社のライバル会社に流せない。仕事の増えた分だけ管理アイテムは増えるが、管理手法が増えることは無い。

[10] どうしてそんなに公開がしたいのか、理解に苦しむ。JAXA が全ての情報を集約することは大切であるが、次の開発に役立てるために行なうのであって、外国にまでただで流出してしまいかねない、公開を行う必要は無いと考える。

形の契約の方が良いと思う。ご検討をお願いします。

池上：無償の場合ということですか。

松尾：少し戻りますが、東大阪の「雷」と云うのは何か。どこかの客先からの依頼でやるのか。

JAXA 吉川：元々、東大阪市でロケットを作りたいという動きと、あと雷先生という、雷をもう 30 年やっていらっしゃる先生がいらっしゃって、この先生は、従来、地面から電波を上げて雷を測定していた。其れがカバーできる空が狭いので、此れを宇宙側から観測すれば、非常に広域に渡って雷の発生の事前予測が出来るという話が別途あり、この二つが東大阪の試みでドッキングしたという状況である。

文科省 藤田：多分、大阪大学の川崎先生という方の、今、気象庁でドップラーレーダーを〇〇とか雷の観測に提供しているが、より先端的な観測にブロードバンドレーダーを研究されている。その先生と東大阪の組合とが組んで、宇宙にブロードバンドレーダーを載せ、宇宙からレーダーを出して観測するのであろう。

松尾：要するに、主体が二つあるような話ですね。

JAXA 吉川：東大阪の中小企業様は、兎に角街づくり、ものづくりをやっていく、町の活性化からスタートした。それで衛星を作るが、その衛星の使い道は川崎先生の試みを載せようという経緯と伺っている。

松尾：はい、どうもありがとう御座います。よろしゅう御座いますか。

青江：ソラン株式会社の活動は、これから先の話であるが、もっと多くの人に知ってもらうと良いですね[11]。障害を持つ人たちに、どう関わりながら、衛星が出来上がるのか、みたいな話が、もっと多くの人に知ってもらうように。

JAXA 吉川：はい、畏まりました。

松尾：はい、どうもありがとう御座いました。（次の議題へ進む）

---

[11] 真平らに扱うのが正しい選択ではないか。「ソラン株式会社は社会福祉に興味を持つ会社である。マル。」宇宙開発とは無関係のことである。